

ダニエル書 - 第三十二番

獅子から欺きに至るまで：ダニエル書6章と終末預言の徹底解説

Jeff Pippenger

2023-12-27

ダニエル書第六章は、ダニエル書の最初の六章における第三の筋であり、日曜法危機の例証を直接示している。第三章では、ネブカドネザルの金の像と三勇士が、掲げられる旗印を表しており、全世界がそれを目にする。

そこでネブカドネツアル王は、太守、総督、長官、裁判官、財務官、顧問官、執行官、および各州のすべての支配者たちに使者を送り、ネブカドネツアル王が立てた像の奉獻式に参集するよう命じた。ダニエル書 3:2

第3章では、三人の義人はひれ伏すことを拒み、その行為のゆえに燃える炉の迫害が彼らに降りかかった。一方、第6章のダニエルは一日に三度ひざまずき、その行為のゆえに獅子の穴の迫害が彼に降りかかった。一節一節を重ね合わせるなら、これは日曜法による迫害を礼拝の決断として示しており、その決断はどちらの場合も忠実な者たちによってすでに定められている。三と一の組み合わせで十四万四千を象徴している者たちは、迫害という揺さぶりが到来する前に、すでに真理に確立されている。

天使は言った。「自己を否定せよ。汝らは速やかに歩みを進めねばならない。」私たちの中には、真理を得て一步一步前進する時間が与えられてきた者もあり、私たちが踏み出した一步一步が、次の一步を踏み出す力を与えてくれた。だが今や時はほとんど終わろうとしており、私たちが何年もかけて学んできたことを、彼らは数か月で学ばねばならない。彼らには捨て去るべきことも多く、学び直すべきことも多い。布告が発せられるとき、獣とその像の刻印を受けまいとする者は、今からこう言い切る決断を持たねばならない—「否、私たちは獣の制度を顧みない。」 Early Writings, 68.

第5章では、日曜法が地の獣の終わりとなり、壁を通過して来た敵によってもたらされた裁きを取り上げている。

その夜、カルデヤ人の王ベルシャザルは殺された。メディア人のダリウスは、およそ六十二歳で王国を受け継いだ。ダニエル書 5:30、31

第六章では、獅子の穴に王の印章が押されることによって象徴される神の民の封印が示されている。

そして一つの石が運ばれてきて、穴の口に置かれた。王はそれを自分の印璽と貴族たちの印璽で封印し、ダニエルについての決定が変えられないようにした。ダニエル書 6:17

三本の線はいずれも、黙示録第十一章の大地震の時に雲の中で掲げられる旗印の特徴に寄与している。

そして、彼らは天から彼らに「ここへ上れ」と告げる大いなる声を聞いた。彼らは雲に乗って天に上って行き、彼らの敵はそれを見た。その同じ時刻に大きな地震が起こり、都の十分の一が倒れ、地震で七千人が命を落とした。残りの者たちは恐れおののき、天の神に栄光を帰した。ヨハネの黙示録 11章12、13節

ダニエル書第六章は、神の民の封印を明らかにしているが、より具体的には、ダニエルを殺すよう王を欺いた「総督、知事、諸侯、顧問、隊長」から成る結託した集団に対する処罰を扱っている。王（国家の象徴）が欺かれるという主題は、いくつかの預言的証言を含む重要な預言の主題である。第三章のネブカドネザルや第五章のベルシャザルが、危機が到来するまでダニエルと三人の証人の存在に気づいていなかったのとは異なり、危機に先立つダニエルに対するダリウスの「寵愛」は、日曜法の危機に対して異なる舞台を示している。

ダニエルは、ほかの二人の総監よりも「重んじられて」いた。また、三人の総監は百二十人の総督の上に置かれていた。ダニエルは主として総監たちおよび総督たちと対比され、五（五人の愚かな乙女）によって表される欺きの同盟を結ぶその二人よりも、彼は重んじられている。

ダリウスは、王国の全土を治めさせるために、百二十人の総督を立てることを良しとした。さらに、その者たちの上に三人の長官を置き、そのうちの筆頭はダニエルであった。これは、総督たちが彼らに報告を上げ、王が損害を被らないようにするためであった。ところが、このダニエルは内に優れた霊があったので、長官や総督たちの上に抜きん出ており、王は彼を全王国の上に立てようと考えた。そこで長官たちと総督たちは、国政に関してダニエルに対する口実を見つけようとしたが、口実も過ちも何一つ見いだせなかった。彼は忠実で、彼のうちには誤りも過失も見つからなかったからである。すると彼らは言った、「このダニエルに対しては、彼の神の律法に関すること以外に、口実を見つけることはできないだろう。」ダニエル書 6:1-5。

ダリウスは、世の終わりに十人の王（国際連合）を象徴する王に対して仕掛けられる欺きを例証するために用いられている。その欺きは、十人の王（国際連合）が淫婦（教皇制）に対して示す憎しみを助長し、その憎しみによって彼らは「彼女を荒廃させ、裸にする」および「その肉を食らい、火で焼く」ことに至る。

そして、あなたが獣の上に見た十本の角は、淫婦を憎み、彼女を荒れ果てさせ、裸にし、その肉を食らい、火で焼き尽くすであろう。というのは、神がご自分の御心を成就させるために、それを彼らの心に入れ、彼らを一つ思いにし、神の言葉が成就するまで、彼らの王権を獣に渡すようにされたからである。あなたが見た女は、地の王たちを支配しているあの大いなる都である。ヨハネの黙示録 17:16-18。

国際連合（第七の王国）は、つい最近自分たちの王国をローマ教皇制に与えたばかりであるにもかかわらず、ローマ教皇制を滅ぼすだろう。というのも、彼らの支配は「短い期間」にすぎないからである。

また、七人の王がいる。五人は倒れ、一人はいまいる。もう一人はまだ来ていない。彼が来るときには、短い間だけとどまらなければならない。黙示録 17:10

日曜法の時、聖書の預言における第六の王国である黙示録13章の地から上がってくる獣（アメリカ合衆国）は、イザヤ書23章の象徴的な七十年の統治をちょうど終えたところであり、その七十年のあいだ、聖書の預言における第五の王国、すなわち黙示録13章の海から上がってくる獣（教皇権）は忘れ去られていた。

その日、ツロは一人の王の日数にしたがって七十年の間忘れられる。七十年の終わりに、ツロは遊女の歌のように歌う。「琴を取り、町を巡れ、忘れられた遊女よ。美しい調べを奏で、多くの歌を歌え。そうすれば、あなたは思い出される。」七十年の終わりの後、主はツロを顧みられ、彼女は再び報酬を得ることに向かい、地の面の上にある世界のすべての王国と姦淫を行う。イザヤ 23:15-17。

日曜法が施行されると、聖書の預言における第七の王国、すなわち十人の王（国際連合）が支配を開始する。しかしそれはつかの間にはすぎない。というのも、十人の王の筆頭に立つ王が、全世界に、獣の体制の下に従うことを強いる働きをそのとき開始するからである。この獣の体制は教会と国家の結合であり、獣の像として象徴されている。

また私は、地から上ってくるもう一つの獣を見た。彼には子羊のような二本の角があり、竜のように語った。彼は第一の獣の前でそのすべての権威をふり、致命的な傷が癒やされたその第一の獣を、地とそこに住む者たちに拝ませた。また彼は大いなるしるしを行い、人々の目の前で天から火を地上に降らせた。また彼は、その獣の前で行う力を与えられていたそれらの奇跡によって地に住む者たちを惑わし、地に住む者たちに、剣で傷を受けながら生きのびたその獣の像を造るようにと命じた。黙示録 13:11-14。

子羊のように始まり、最後には竜のように語る地の獣（アメリカ合衆国）の象徴性における主要な要素は、その語ることである。予言的には、語ることは立法および司法当局の行為を指し示す。

「国家の発言とは、立法府および司法府の行為である。」『大論争』443頁。

アメリカ合衆国が初めて子羊のように語ったとき、アメリカ合衆国憲法を制定し、こうして、教皇権とヨーロッパの諸王による迫害から逃れる人々のための避難の地を確立した。

そして地は女を助け、地はその口を開き、竜がその口から吐き出した洪水を飲み込んだ。ヨハネの黙示録 12:16。

象徴的な七十年の終わりに、地の獣は再び語るが、そのときは竜として、教皇権威のしるしである日曜礼拝を強制する。教皇権威のしるしが強制されるとき、教皇制は想起される。また、決して忘れてはならない戒めを守ることが違法とされるとき、教皇制は想起される。

安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いて、あなたのすべての仕事をしなさい。しかし、第七日はあなたの神、主の安息である。この日には、あなたも、あなたの息子も娘も、あなたの男のしもべも女のしもべも、あなたの家畜も、あなたの門の内にいる寄留者も、どんな仕事もしてはならない。主は六日のうちに天と地と海とその中にあるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。ゆえに主は安息日

を祝福し、これを聖別された。出エジプト記 20:8-11.

国家的背教の後には国家的破滅が続き、世界をハルマゲドンへと導く三つの勢力が手を組む。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心霊主義と手を結び、この三重の連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けると、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」『証言』第5巻、451頁。

「プロテスタンティズム」（アメリカ合衆国）、「ローマの権力」（バチカン）および「スピリチュアリズム」（国際連合）が日曜法において手を結ぶとき、彼らは世界をハルマゲドンへと導き始める。それは、まず教会と国家から成り、その関係を教会が支配する一つの世界政府の権威を世界に受け入れさせることとして描かれている。地の獣が用いる奇跡の力は、ツロの淫婦が地の王たちと姦淫するに至らしめるだけでなく、獣の世界的な像に「語らせる」ことをも強制する。予言上の定義によれば、これは、その世界政府が立法機関（ニューヨークに所在）と司法機関（ハーグに所在）を持たねばならないことを意味する。

また、彼は獣の前で行うことを許されたあの奇跡によって地に住む者たちを惑わし、剣で傷を負いながらも生きたその獣の像を造るようと、地に住む者たちに言った。彼には獣の像にいのちを与える力が与えられ、獣の像が語るようになり、さらに獣の像を拝まない者は皆殺されるようにさせた。彼はまた、小さい者も大きい者も、富む者も貧しい者も、自由な者も奴隷も、すべての者に、右の手か額に刻印を受けさせた。そして、その刻印、または獣の名、またはその名の数を持つ者以外は、だれも買うことも売ることもできないようにした。ここに知恵がある。理解のある者は獣の数を数えよ。それは人の数であり、その数は六百六十六である。黙示録 13:14-18。

地の獣（アメリカ合衆国）は、世界全体を欺いて、獣の像を世界規模で受け入れさせる。これは、アメリカ合衆国が日曜法の制定へと導き、最終的にそれを施行した際に作り上げたのと同じ像である。その後、地の獣は世界統一政府に権限を与え、死刑および／または経済的制裁をもってその法律を執行させる。ダリウス王の欺きは、預言の中で繰り返し指摘されている王たちの欺きの象徴である。というのも、地の獣が世界に対して世界統一政府の受け入れを強制し始めるとき、その体制を受け入れさせるために用いられる論拠は、諸国民を怒らせてきた力（イスラム）には世界規模の戦争で対抗しなければならない、というものだからである。

アメリカ合衆国は教皇の権威の印を強制する。なぜなら、日曜法に至る過程で、神の裁きが合衆国を深刻な危機に陥れ、カトリックの神に立ち返れば増大し続けていた経済的困難は終息する、という解決策が提示されたからである。しかし日曜法の時、低い城壁の下から忍び込んでいた敵が、国家的破滅の裁きをもたらす。

そして大いなる欺き手は、人々に、神に仕える者たちこそがこれらの災いの原因だと信じ込ませるだろう。天の不興を買ってきた階級は、神の戒めへの従順が違反者に対する絶えざる譴責となっている人々に、自分たちのあらゆる災難の責めを負わせるだろう。日曜安息日を破ることによって人々は神を怒らせている、この罪のために災厄がもたらされ、それは日曜日の遵守が厳格に施行されるまでやむことはない、そして第四戒の要求を主張して、こうして日曜日への尊崇を打ち壊している者たちは民を悩ます者であり、神の恵みと地上的繁栄への回復を妨げているのだ、と宣言されるだろう。こうして、昔、神の僕に対して突きつけられた非難が、同様にもっともらしい根拠に基づいて繰り返されるのである。「アハブがエリヤを見たとき、アハブは彼に言った、『イスラエルを悩ます者はおまえか。』彼は答えた、『イスラエルを悩ましているのは私ではない。主の戒めをあなたがたが捨て、あなたがバアルに従ったので、あなたとあなたの父の家こそがそうしているのだ。』列王記上18章17、18節。」人々の怒りが虚偽の告発によってかき立てられるとき、彼らは、背信のイスラエルがエリヤに対してとったのと非常に似た態度を、神の使者たちに対してとるようになるだろう。大いなる論争、590。

黙示録第十一章の「大地震」の「時」に、イスラムの「第三のわざわい」、すなわち第七のラッパが鳴り響き、諸国を怒らせる。イスラムに対する諸国のその怒りは、世界を欺いて、地の獣に対して直前に失敗したのと同じ空しい約束を受け入れさせるために用いられる。その空しい約束とは、教皇権の印によって表されるカトリックの権威に服従すれば、強まっていく神の裁きが止むというものである。この約束は、すでにアメリカ合衆国に対しては効果がないことが証明されているが、やがて狼狽する世界への約束として用いられる。

世界の諸国が合意し、イスラムによってもたらされた戦争に対処する目的で世界統一政府の樹立を容認しさえすれば、安定が戻ると主張されるだろう。聖典において、イスラムはイスラムに対抗して万人を結集させる力であるとされているが、その結集こそが、王たちによる究極の欺瞞である。

主の御使いは彼女に言った。「見よ、あなたは身ごもっており、男の子を産む。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞かれたからである。彼は荒々しい人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手も彼に逆らう。彼はすべての兄弟たちに向かい合って住むであろう。」創世記16:11、12。

イシュマエルはイスラム教の霊的な父である。イスラム教の父とされるムハンマドが歴史に登場したのは7世紀になってからだというのは事実だが、古代の實在の人々は、終わりの時代の霊的な民を表すために神が用いるものである。

イスラエルの王である主、その贖い主なる万軍の主はこう言われる。わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はない。わたしがいにしえの民を定めるとき以来、わたしのように呼びかけ、これを告げ、わたしの前に順序立てて示しうる者はだれか。これから来ること、やがて起こることを、彼らに告げさせよ。イザヤ書44章6、7節。

イシュマエルが生まれる前に、すでに彼には名が与えられ、その預言的な役割が定められていた。彼の霊的な子孫たちの手は「すべての人に敵対し」、また「すべての人の手」

は「彼に」敵対するだろう。そして、進歩的自由主義の愚かな教えとは異なり、聖書はイシュマエルが「そのすべての兄弟たちの前に住む」と教えている。彼らは周囲の文化に同化せず、むしろ多くはそれを非難し、抗議し、攻撃する。イシュマエルの霊の性質は、「彼」が「野性的な人間である」ということだ。イスラム教に平和的な集団が存在するという考えは、神の言葉にも、コーランにも支持されていない。

ダニエル書第六章における二人の長官と百二十人の諸侯の欺きは、十人の王たちが、ローマの支配下の世界統一政府を導入する目的と緊急性は「第三のわざわい」であるイスラムの戦争の激化に対処するためだと信じ込まれるときに、彼らにもたらされる欺きを指し示している。いったん獣の像が据えられ、「語る」力を与えられると、世界は手遅れになってから、教皇制の目的が、無防備な南の城壁から忍び込んだ敵ではなく、第七日安息日を堅持する者（ダニエル）に向けられているのだと知ることになる。

神の言葉は差し迫った危険を警告してきた。この警告を顧みなければ、プロテスタント世界は、罠から逃れるには遅すぎる時になってはじめて、ローマの真の目的が何であるかを知ることになるだろう。ローマは静かに権勢を拡大している。ローマの教義は、立法の場においても、諸教会においても、そして人々の心の中においても、その影響力を及ぼしている。ローマは、秘かな奥まった場所に、かつての迫害が繰り返されることになる、その高く巨大な建造物を築き上げている。ローマは、人に悟られぬようひそかに、時が来て打って出るために自らの目的を進められるよう、その勢力を強化している。ローマが求めるのは有利な地歩だけであり、それはすでにローマに与えられつつある。私たちは間もなく、ローマ的要素の目的が何であるかを目にし、そして身をもって感じることになる。神の言葉を信じ、これに従う者はだれであれ、そのために非難と迫害を被ることになる。『大いなる争い』581ページ。

教皇権が行う国際連合をめぐる欺きは、人々の心に復讐心を生じさせるものであり、そのことは聖書においてしばしば示されており、ダリウスの物語はこの真理の主要な例である。これは、まずアメリカ合衆国で成し遂げられ、その後、世界で繰り返される欺きである。この真理はエリヤとイゼベルの物語に示され、さらにバプテスマのヨハネとヘロデヤの物語、そしてキリストの十字架刑にも見いだされる。イスラムが諸国を怒らせることは、教皇権が用いる策略であり、それによって教皇権は、世界中の安息日を守る者たちを攻撃するための有利な立場を得る。

イスラムについての最初の言及は、聖書におけるイシュマエルの登場であり、終末においてイスラムに割り当てられているとされる役割——世界を普遍的な恐慌に陥れて、人々がどんな提案でも解決策として受け入れるようにすること——こそが、欺きを成就させることを可能にする。この欺きこそが、国際連合（十人の王）に神の御心を果たさせ、彼らの王国（第七の王国）を教皇権（獣）に与えることに同意させる動機となる。

ダリウスによって示された欺瞞は、他の預言の筋とともに、イスラムが列国を怒らせる役割、教皇権が国際連合によって滅ぼされる最終的な理由、そして同じく重要なこととして、第八の王国という謎をめぐる状況、すなわち現代のバビロンの頭として七に属するものが据えられることを含んでいる。

獅子の穴のダニエルは非常に複雑な預言的表現だが、その理解は「行に行を重ねる」という方法論を適用したときにのみ得られる。

ダニエル書6章は次回の記事で続けます。

「私たちが一つの民として、この本が私たちにとって何を意味するのかを理解するとき、私たちの間に大いなるリバイバルが起こるだろう。」『Testimonies to Ministers』113ページ。